

### ■ “声や思い” を共有する先生方と一発足その趣旨—

「子どもたちが楽しみながら、自然に身につけられる地図を」「子どもたちの学びに生かす地図を」「子どもたちの学びの手元にいつも地図帳を」という小学校・中学校の先生方の声が聞かれます。そして、その声には「頭打ちとなっている自分の授業を、何としても突き破りたい」「自分自身の地理や地図についての関心や力量を高めなければ……」という先生方自身の切実な思いも伝わってきます。このような声や思いに込められた課題に向かって、それを共有する先生方と一緒に体験的にアプローチしていこうと「実践マップスキル研究会」を発足させました。



筆者講演

ところで、実際に「総合的な学習の時間」が動きだして、子どもたちが「地図」を活動の中に位置づけているのを目にすると、「社会科が生きているなあ！」と、その姿にあらためて基礎基本とか応用とかを意識させられます。私たちは、これまで

「社会科と地図」は、子どもたちが「科学的なものの見方・考え方」「民主的平和的なものの見方・考え方」を身につける上で、切っても切れないものと考えてきました。それは、子どもたちが「地図と遊ぶ」「地図を読む」「地図に描く」という活動を通して、そこに展開する自然の環境や人々の生活を読み取ったり、生活する人々の思いや願いを感じたりし、そして、そこに自らの思いや願いを確かに発信していくという学びの広がりを見取ってきたからです。このような手応えは、冒頭の先生方の声や思いの一つひとつからもうかがえるのです。

### ■教室の子どもたちの目線を背にして—講座の実際—

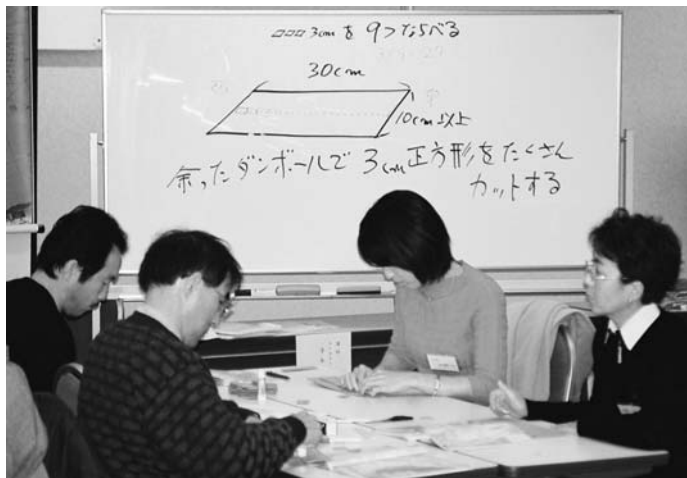
第1回「実践マップスキル研究講座」は、昨年7月に、そして、第2回を12月に、それぞれ2日間にわたって開催しました。私たちの予想をはるかに越える応募をいただきスタートすることができました。

おもなメニューは、「私は何国人？国当てゲーム」「だから上越に雪が！日本全図」「渡りはつらいよ！世界地図」「ドットマップ作成法」「略地図習得術！」「グローブスキル」「段ボールで大陸横断地形模型作成」等々、そして、会場近辺を3班に分かれてのフィールドワークです。いずれも、寺本潔（愛知教育大）、田部俊充（日本女子大）両講師の発案によるもので、講師と参加された先生方の双方向からのアクティビティーによって、一つひとつのメニューに潜む地理的見方・考え方やマップスキルが具体化されていくのです。

「じっと見る」「数えて見る」「比べて見る」「辿って見る」「括って見る」「重ねて見る」…、そして、「この地図を見ると、何がわかる？」「これを地図にすると、何が見えてくる？」…と、作業をしながら一つひとつのメニューを掘り起こしていく先生方の姿は、あたかも教室の子どもたちの目線を背にしてい

るかのようで、真剣な中にも笑いも起こるといふ、臨場感にあふれた光景でした。

2日目の昼食を兼ねた2時間余りのフィールドワークは、まさに室内作業の屋外編です。それぞれ丸の内・日本橋・神田界限を歩きながら、「地理的な見方・考え方」や「地図」を実際に活用し、それぞれの地域の特性に迫るのです。都内から参加され、この界限をよく知っていると言われる先生が「街の中の一つひとつの繋げ方によって、街が今までとはまったく違って見えてくる！」と、感想をもらっていたのが印象的でした。



講座のようす

### ■校内研究へのひろがり—講座の手応え—

昨年の11月に入って、第1回目の研究講座に参加された小学校のO先生から、「講座で研修したことを6年生の教室で実践してみたいので、ぜひ参加を」というお誘いをいただきました。この学校では全校あげて「コミュニケーション力の育成」をテーマに取り組んでいて、先生は、私が講座の挨拶代わりに話した『まちの移り変わり・まちはいきもの』を、6年の政治単元の導入に応用してみようというのです。つまり、「自分たちの町の移り変わりに見られる政治」という内容と同時に、「コミュニケーション・ツールとしての地図の存在」を、子どもたちと考えようという積極的な提案なのです。もちろん、よ



講座のようす

ろこんで参加させていただきました。そして、そこでの子どもたちが描き出すユニークな動きに、あらためて地図のもつ力を知らされたのです。O先生、ありがとうございました。

講座を終えた先生方から「覚える学習から作業を通して考える学習へと方向づける」「地図の活用を指導計画に位置づけ実践する」…、そして、「地理で人生を2倍楽しめるような信念をもった指導を」という感想をいただきました。いずれも今後予定される第3回、第4回の研究講座の柱になる重要な一言一言です。

全国の先生方の賛同を得て、この研究会の輪が回ごとに広がればと期待しています。

